

## 聖書ヘブライ語の物語における 前景・背景，そして語り手に関する一考察

池田 晶

### 1. はじめに<sup>1</sup>

聖書ヘブライ語の物語談話を分析する際には、Weinrich (1964) や Hopper (1979) の前景・背景理論が用いられてきた。その際、地の文が主な分析対象とされてきており、会話文は物語の筋を「物語る」部分ではないという理由でほとんど分析対象とされてこなかった。しかし会話文の中でも「物語る」部分があるために、従来まで言われてきた地の文の前景・背景のみが、本当に物語全体の前景・背景だと言えるのか、それとも、理論そのものに不十分な点があるのか、という疑問が筆者にあった。本稿では創世記のヨセフ物語の中の、登場人物であるファラオの体験が、地の文の中で語られている部分と、ファラオがその体験をヨセフに語る部分、つまり会話文中で個人的体験談として再話される部分（一人称物語）とを比較しつつ分析をすすめる。その際、前景・背景をみる際には、意味や動詞形態だけでなく語り手の問題も射程に入れて考察する必要があるということを示す。

本稿では「物語」、「個人的体験談」を分析するので、まずはそれらの定義を確認する。その次に聖書ヘブライ語の動詞組織と Weinrich (1964) や Hopper (1979) の前景・背景理論について概観する必要があるので、まずそれらを簡単にまとめる。その次に、実際に前景・背景理論を用いてテキスト分析を行い、さらに前景・背景理論に「語り手」の交替という考えを組み入れる可能性を示すという手順を取りたい。

### 2. 聖書ヘブライ語の動詞組織

聖書ヘブライ語の動詞には、次のものがある。preterite には *wayyiktol* 形、volitive には *ʔektol / niḳtol*、それぞれ歴史的起源は異なるが jussive と imperfect には *yiktol* 形がある<sup>2</sup>。このほかに、伝統的には完了形とされてきた *ḳotal* 形があるが、池田潤 (2004) では、最新の比較セム語学の成果を踏まえたうえで、*ḳotal* は「(1) 聖書ヘブライ語の *ḳotal* 形は Tense, Mood, Aspect (以降 TMA) に関して無標である、(2) *ḳotal* 形の TMA は文脈 (前の文の TMA と構文、同一文中の副詞) によって決まる、(3) 文脈からとくに指定がない場合、*ḳotal* 形の動詞の意味に応じてデフォルト値 (動作動詞は過去、状態動詞は現在ないし習慣) をとる」という3つの提案をした。ただし、池田潤 (*ibid.*) では会話文は分析の対象とはなっていない

かった。そこで、池田晶 (2005)では、会話文における *koʔal* 形を分析した結果、池田潤 (*ibid.*) の枠組みに若干の修正を加えることによって、会話文の *koʔal* 形を分析する際の枠組みとして、「(1) 地の文と同じく TMA に関して無標な *koʔal* 形も見られる。(2) 会話文における聖書ヘブライ語の *koʔal* 形のデフォルト値は人称との関わり、地の文のそれとは異なる例が多く見られる。2 人称で非過去のときは命令のムードを帯びることが多い」という提案をした。

### 3. 前景・背景理論<sup>3</sup>: Weinrich (1964), Hopper (1979)

前景・背景理論では、物語における主筋的である事象と、副次的事象が区別されている。物語の主要な出来事 (*main-line event*) は物語の言わば「前景 (*foreground*)」であって、それを物語る時制は過去形で表現され、それ以外の小さな出来事は非過去形で表現される傾向があるという。それに対し、副次的事象「背景 (*background*)」は、主筋の事象と時間的に一定の順序に従っているわけではなく、むしろそれは主筋の事象を説明したり、敷衍したりする目的に使われ、主筋の事象と同時的であるため、その動詞は継続的、状态的、反復的であり、未完了的であるという。Hopper (1979: 215) では「前景化された文だけが真の物語を綴るもので、背景化された文はそもそも物語るのではなくて、むしろ、物語を支え、補充し、それに注釈を加える」と述べられている。この前景・背景理論について、特に日本語での物語に関連があると思われるものとして曾我松男 (1984) では、次のことが指摘されている。主筋の事象 (つまり前景) は、時間的順序で述べられるものであり、そこでは、一つの事象が、次の事象のまえに完了していなければいけないため、よく完了形が使われるということである。

### 4. 聖書ヘブライ語の前景・背景理論研究: 動詞時制と前景・背景の 1 対 1 対応とその批判

紙幅の関係で研究史<sup>4</sup>を振り返ることはできないが、Weinrich (1964) から着想を得てこの立場を最初にとったのはSchneider (1974) である。これによると、*wayyikʔol* 形が物語の前景 (*foreground*) を、その他の形は物語の背景 (*background*) だとされる。そしてHopper (1979) の枠組みで聖書ヘブライ語を分析した池田潤 (1985) をはじめとして、多くの研究でも *wayyikʔol*形 = 前景、*koʔal*形 = 背景というように動詞の形態と時制選択を1対1に対応させていた。

遠藤 (2003) は、前景・背景理論の有効性を認めながらも、前景・背景の区別が分極化している点で問題であると指摘する。そして、機械的に二極対立で動詞の選択を説明することは、複雑なテキストのニュアンスを、これは前景、あれは背景といった意味内容の領域に踏み込んだ単純な2つに還元するということで、テキストの解釈上の問題を引き起こす可能性がある、と述べている。遠藤 (*ibid.*: 81-82) では物語の「本筋」というものに疑問を投げかける。結果的には遠藤 (*ibid.*: 87) に「情報の近景・遠景の程度というものは、動詞形

態の違いといった統語論上の問題というよりも、もっと意味論の領域の問題として（中略）動詞自体の持つ語彙的意味や、句全体として持つ意味内容によって規定されるように思われる」とあるように、動詞の時制選択だけでは前景・背景が決定できないということ述べる。また、牧野 (1983) が日本語の物語の文章における時制転換の研究の中で、「近景・遠景化の度を測る独立の原理が見つからないと、単純に時制の選択と結び付けられ、議論は循環論法に陥ってしまうであろう。」という意見を紹介する。

池田潤 (2004) は最新の比較セム語学の成果を取り入れ、動詞の形態だけでなく、例えば動詞の意味にも注意を向けるなどして、多くの基準を採用して、総合的に前景・背景を判断するという方法が提示され、wayyikto! 以外も前景となりえることが示された。

以上のことから、動詞の時制選択と前景・背景とを固定的に対応させて捉える方法では無理が生じるということが明らかとなった。このことから、物語の前景・背景を捉えるには、動詞の形態にとらわれない新たな方法を模索する必要がある。筆者は物語の前景をみるにあたり、重要だと考えられる要素は「出来事 (event) の時間に沿った連鎖性」なのではないかという考えを持っている。池田晶 (2006) では、その「時間に沿った連鎖性」という枠組みを用いて、背景をマークすると言われてきた小辞hinneは前景を担うことがある、ということを明らかにした。本稿では、event を動詞の形態だけからではなく「時間の中の連鎖性」という枠組みの中で捉えたいと思う。

## 5. 分析

### 5.1. 分析例 < 1 > 【Gen.41:1-4】：動詞の形態だけでなく、時間の連鎖を重視した分析

(1) から (9) までは、語り手によって地の文でファラオの体験が報告されている。四角で囲んだ部分は wayyikto! である。

#### (1) 【Gen. 41:1a<sup>5</sup>】 非 event 1 (時間設定)

יָמִים מִקֵּץ שְׁנָתַיִם יָמִים יָהָיָה : 二年の後のこと [だった(wayyikto!:preterite)]。

#### (2) 【Gen. 41:1b】 非 event 2 (以下の物語の全体像を提示)

וּפְרָעָה חֲלָם : ファラオは夢を見た (分詞)。

#### (3) 【Gen. 41:1c】 非 event 3 (場面設定)

וַיְהִי עַמֻּד עַל־הַיָּאֵר : ヒンネー、ナイル川のほとりに立っている (分詞) と

#### (4) 【Gen. 41:2a】 event 1 (物語開始)

וַיְהִי מִן־הַיָּאֵר עֹלָת שֶׁבַע פְּרוֹת יְפוֹת מְרֵאָה וּבְרִיאַת בָּשָׂר :

ヒンネー、つややかな、よく肥えた七頭の雌牛が川から上がって来て (分詞)、

#### (5) 【Gen. 41:2b】 event 2

בְּאֶחָד : 葦辺で草を [食べた(wayyikto!:preterite)]。

#### (6) 【Gen. 41:3a】 event 3

וַיְהִי שֶׁבַע פְּרוֹת אַחֲרוֹת עֹלֹת אַחֲרֵיהֶן מִן־הַיָּאֵר קְעוֹת מְרֵאָה וְדַקּוֹת בָּשָׂר :

ヒンネー、その後から今度は醜いやせ細った七頭の雌牛が川から上がって来て (分詞)

(7) 【Gen. 41:3b】 event 4 : **וַתַּעֲמִדְנָה** אֶצֶל הַפְּרוֹת עַל-שֵׁפֶת הַיָּאֵר :

ナイルの川辺にの雌牛のそばに **立った** (wayyikṭol:preterite)。

(8) 【Gen 41:4a】 event 5

**וַתֹּאכְלֶנָּה** הַפְּרוֹת רְעוּת הַמְּרֹאָה וְדָקָת הַבֶּשֶׂר אֶת שְׁבַע הַפְּרוֹת יַפְתַּח-הַמְּרֹאָה וְהַבְּרִיאָת

そして、醜いやせ細った雌牛が、つややかなよく肥えた七頭の雌牛を

**食べ尽くした** (wayyikṭol:preterite)。

(9) 【Gen 41:4b】 event 6 (物語終了)

וַיִּיקַן פַּרְעֹה : ファラオは、そこで **目が覚めた** (wayyikṭol:preterite)。

(1) は be 動詞に相当する wayyikṭol 節であるが、これは物語の時間設定をする部分である。(2) は以下の物語の全体像を説明する部分である。(3) から物語の語り手がファラオの視点に立って舞台設定がなされる。(3) は出来事の起こったナイル川岸という舞台を示しているという理由で、また hinne に後続する分詞 עֹמֵד は、ここでは「立っている」というように状態性 (未完了相的) を帯びている、という2つの理由で出来事を語っていない、ということが支持される。

(4) から物語が始まる。ここで出現する分詞 עלת は明らかに(5)の wayyikṭol 形 וַתֹּרְעֶנָּה (食べた) と連鎖をなしているので(4) の hinne 節は出来事を語る wayyikṭol 節と同じく、物語の前景をなしている。これと同様に (6) も後続する (7) の wayyikṭol 形と連鎖をなしているので(6) の hinne 節も wayyikṭol 節と同じく物語の前景をなすと言える。以下 (9) まで wayyikṭol 節による報告が続くが、明らかにここに出現した分詞を含む hinne 節は wayyikṭol 節と連鎖をなし、物語の前景となる。

## 5.2. 分析例 <2> 【Gen.41:5-7】: 夢と現実の時間の連鎖について

(10) 【Gen. 41:5a】 event 1 **וַיִּישָׁן** : **彼 (=ファラオ) は眠った** (wayyikṭol:preterite)

(11) 【Gen. 41:5b】 event 2 **וַיַּחֲלֹם שְׁנֵי** : **再び彼は夢を見た** (wayyikṭol:preterite)

(12) 【Gen. 41:5c】 event 3 : **וַהֲנִיחַ שְׁבַע שְׁבָלִים עֲלוּת בְּקִנְיָה אַחַד בְּרִיאֹת וְטִבּוֹחַ :**

ヒンネー、太ってよく実った七つの穂が、一本の茎から **出てきた** (分詞)。

(13) 【Gen 41:6】 event 4 : **וַהֲנִיחַ שְׁבַע שְׁבָלִים דְּקוּחַ וְשֵׁדוּפַת קָרִים צְמַחוּת אַחֲרֵיהֶן :**

ヒンネー、その後から実っていない風で干からびた七つの穂が **生えてきた** (分詞)。

(14) 【Gen. 41:7a】 event 5

**וַתִּבְלַעַנָּה** הַשְּׁבָלִים הַדְּקוּחַ אֶת שְׁבַע הַשְּׁבָלִים הַבְּרִיאֹת וְהַמְּלֹאֹת

実の入っていない穂が、太って、実の入った七つの **穂のみ込んだ** (wayyikṭol:preterite)。

(15) 【Gen. 41:7b】 : event 6 **וַיִּיקַן פַּרְעֹה** : ファラオは、 **目が覚めた** (wayyikṭol:preterite)。

(16) 【Gen. 41:7c】 : 非 event 1 **וַהֲנִיחַ חֲלוֹם** : ヒンネー、夢

まずは (10), (11), (15) から見てみたい。これらは「眠って、夢を見て、そして目が覚めた」という一連の出来事を表しており、しかも、これらは wayyiqtol 形で書かれている。ファラオの現実世界での出来事を記述したものである。

一方、ファラオの夢の中での出来事をあらわした (12), (13), (14) をみると、夢の記述は (12) の hinne 節で始まっている。これに hinne 節で導かれる (13) が後続するが、(12), (13) にははっきりと時間の連鎖が認められる。そしてこれに wayyiqtol 形で書かれた (14) が続く。もちろん(13), (14) の間にも時間的な連鎖が認められる。

それでは、ファラオの現実世界と夢の世界のそれぞれの時間の連鎖の関係はどうなっているのだろうか。まずは、時間の連鎖の分かりやすい (14) (夢の記述の終わり) と(15) (現実世界に戻る部分) を見てみよう。それぞれ wayyiqtol 形で書かれている。夢の世界と現実世界の境界がある(14), (15) はどのように見ればよいのだろうか。まず現実世界に戻る (15) の wayyiqtol 形に注目してみたい。wayyiqtol 形が用いられるのは、その大部分、明らかに前の出来事とのつながりが認められる場合である。創世記の例ではないが、出来事の時間的な連鎖の有無と wayyiqtol の使用についてルツ記に分かりやすい例があるので、それを見てみよう。この例はルツ記の 4 章の冒頭である。理解のために 3 章の後半部分をまとめると次のようになる。

- a) ボアズはルツを娶る約束をするが、そのことを証明するために、次の日に町で民衆にこのことを報告するとルツに誓う。夜も遅いので、ルツはその日ボアズのもとにとどまる。
- b) 早朝、ボアズはルツとナオミのために、ルツにたくさんの麦を持たせて帰らせる。
- c) ルツは、ナオミに、ボアズとの間に起こったことを報告する。(3 章の終わり)
- d) (17) 【Ruth 4:1a】 **וַיָּבֵאוּ אֵלָיו הַשֵּׂעִר** : ボアズは町に上って行った (kotal:default-preterite)。

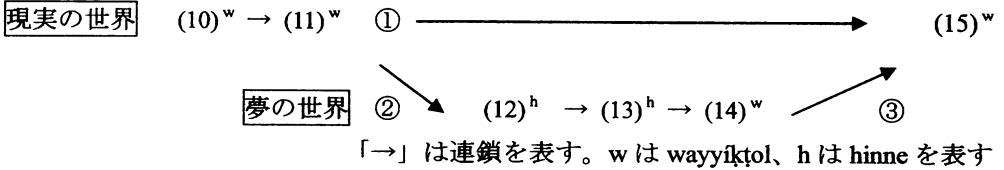
Bush (1996: 196) は、d) (17) で wayyiqtol 形がくることが出来ない理由として、前の場面との時間的な連鎖を断ち切って新しい場面を導入するため、と述べている。(17) のボアズが町の門に行くこの場面は、(c) のルツとナオミの対話より前の出来事か、同時の出来事か、または後の出来事かがはっきりしないからである。もし (17) で wayyiqtol 形が用いられていたとしたら、時間的な連鎖という観点からいうと、(c) の後にボアズが町に上って行った、という解釈になる。

Bush (ibid.) の見解は時間表現の解釈として説得力があると思われる。この見解に従ってファラオの夢と現実の世界の連鎖について考えてみよう。そうすると、現実世界に戻る (15) では wayyiqtol 形が用いられているので、やはり夢の世界の (14) とは時間的な連鎖はあると考えるほうが自然なのではないだろうか。

現実世界から夢の世界へと入ってゆく (11) と (12) はどうだろうか。夢の世界の冒頭で

は wayyik̄tol 形が用いられずに hinne 節で物語が開始している。「(10) 眠って」「(11) 夢をみる」という出来事が起こってからでないと、(12) の夢の世界での出来事は起こりえない。時間の連鎖を模式的に表すと、下の図のようになるだろう。

図 1：現実の世界と夢の世界の時間の流れについて



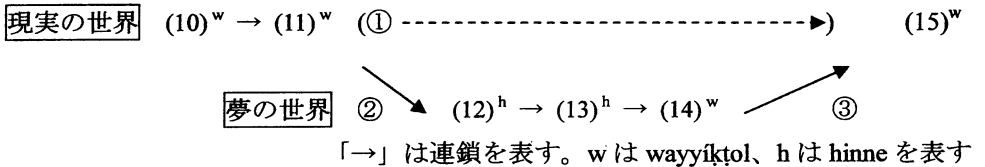
それでは矢印②と矢印③について考えてみたい。筆者は本節の例を分析しつつ、現実と夢の時間の関係について考えた。通常、私たちは（夢ではない）現実の時間の中で生きており、1つの時間軸の中にいる。しかし、眠って夢を見るとき、「現実世界で眠る自分」と「夢の世界で生きている自分」とに分かれてしまう。現実の世界で「眠って」「起きる」という2つの出来事は一連の出来事であるということには議論の余地はないと思う。動詞の形態に注目してみよう。現実の時間での (10), (11), (15) を見ると、wayyik̄tol 形で報告されている。このことから現実の世界で起こった出来事に連鎖を認めることができる。

現実世界の時間から夢の世界へと入って行く部分（矢印②）を見てみよう。現実の世界と夢の世界は次元が異なるので、当然時間の次元も異なる。しかし、現実の世界で「眠って夢を見る」ということが起こらないと、この夢の世界へ入ることができない。このことから、時間の次元は異なるものの、現実と夢の世界とが何らかのかかわりを持っていることが想像できる。こうして、夢の世界への入り口をくぐることによって「現実世界で眠る自分」と「夢の世界で生きる自分」の2つに分裂する。そして、「夢から覚める（目覚める）とき」というのは、夢の世界が終わり、現実の世界へと続く出口をくぐるときである。したがって、夢の世界で起きた出来事と夢の世界から現実世界へと続く出口をくぐる、すなわち「目覚める」という出来事には連鎖があると考えることは無理ではない。この現実世界への入り口をくぐることによって夢の世界が消滅し、分裂した時間が1つになる。夢を見るということによって、現実世界で眠っている自分と夢の中で生きている自分の2人が同時に存在している。このような筆者の見解の中では(11)の wayyik̄tol 形と(12)の hinne 節とは連鎖をなす、という分析は無理な解釈ではないと思う。

それでは別の角度からも考えてみたい。下の図2では矢印①を破線で示して括弧に入れている。眠って夢をみて起きる、という現実の世界の出来事に連鎖性があるのは上で見たとおり言うまでもないことだが、物語の読者は本に書かれた文字や読まれた音声を追うことで、次々に展開してゆく場面を認識してゆく。読者は現実の世界での出来事の連鎖（矢印①）を意識するのではなく、物語の「流れ」に従って矢印②と③を自然に意識するので

はないだろうか。このとき矢印②と③は、物語のメインラインの移動を表していると考えてもよい。つまり、現実の世界がメインラインを夢の世界に譲り渡すということである。もしこの考え方が適切であるとしたら、(10) → (11) → (15)ではなく、(10) から (15) は一本の線で繋がっており、連鎖していると考えてもよいのではないだろうか。

図 2：読者の認識



### 5.3. 分析例 <3> 【Gen.41:17-25】：語り手の交替を視野に入れて

次のテキストで、(18), (24) は地の文を、そして大きな四角で囲んだ部分は会話文を示す。

(18) ☆ 【Gen. 41:17a】 פָּרְעָה אֶל-יֹסֵף וַיְדַבֵּר. ファラオはヨセフに語った (wayyiktol: preterite)

《Gen. 41:17b ~ Gen. 41:21c は 体験者本人であるファラオによる(1)~(9)の再話》

(19) 【Gen. 41:22a】 event 1

וַיֹּאמֶר בְּחַלְמֵי יְאֵרָא: それからまた、夢の中でわたしは見た (wayyiktol: preterite)。

(20) 【Gen. 41:22b】 event 2 : הִנֵּה שִׁבְעַת שְׂבָלִים עֹלֹת בְּקִנְיָה אַחַד מֵלֶאֱחָד וְטַבּוֹת: ヒンネー、とてもよく実の入った七つの穂が一本の茎から出てきた (分詞)。

(21) 【Gen. 41:23】 event 3 : וְהִנֵּה שִׁבְעַת שְׂבָלִים צָנְמוֹת דְּקוֹת דְּקוֹת שְׂדֵפוֹת קָדִים עֲמֻחוֹת אַחֲרֵיהֶם: ヒンネー、その後から…東風で干からびた七つの穂が生えてきた (分詞)。

(22) 【Gen. 41:24a】 event 4 : וַתְּבַלְעַן הַשְּׂבָלִים הַדְּקֹת אֶת שִׁבְעַת הַשְּׂבָלִים הַטַּבּוֹת: そして、実っていない穂が、よく実った七つの穂をのみ込んだ (wayyiktol: preterite)。

(23) 【Gen. 41:24b】 event 5 : וַיֹּאמֶר אֶל-הַחֲרָטְמִים וְאִין מִנִּיד לִי: わたしは魔術師たちに言った (wayyiktol: preterite)。しかし、その意味を告げうる者は一人もいなかった。」

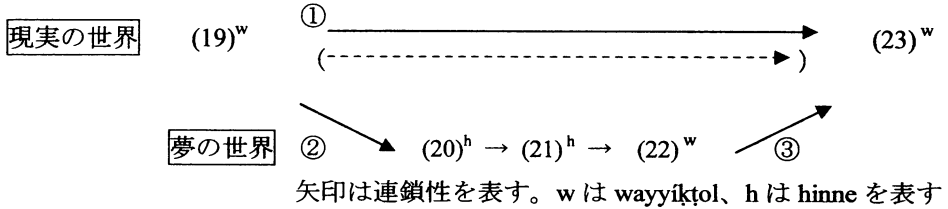
(24) ☆ 【Gen. 41:25a】 event 6 : וַיֹּאמֶר יֹסֵף אֶל-פָּרְעָה :.....

ヨセフはファラオに言った (wayyiktol: preterite) …。

(19) では現実世界での出来事が報告されており、(20)~(22)で夢の世界での出来事が、そして (23)で再び現実世界の出来事が報告されている。(10) から (16) までの分析と同様に、現実世界のことを報告した (19), (23) (図3の矢印①) で 1 つの時間の枠が、そして夢の世界の (20) から (22) で時間の連鎖が認められる。また、(19) と (20) とを結ぶ図3で示した矢印②、夢の世界の (22) と (23) とを結ぶ矢印③も(10) から (16) と同様の解釈ができ

る。読者の認識は、ここでも、(10) から (16) で述べたのと同じ考え方と同じく(19) → ② → ③ → (23) が一直線につながる。

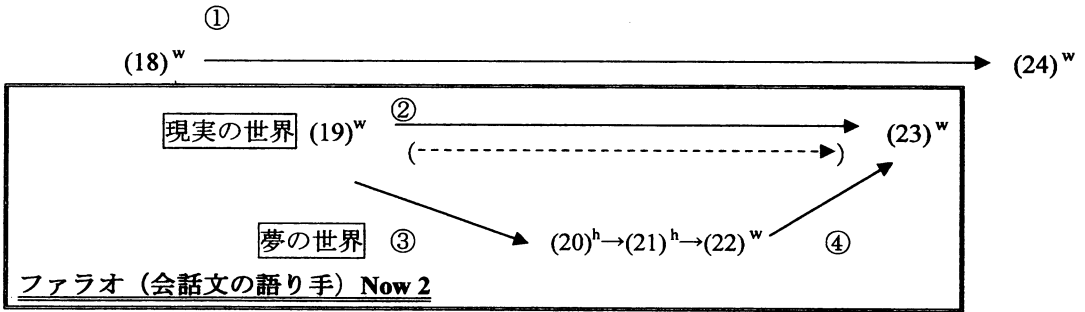
図3：「現実の世界と夢の世界の時間の流れについて」そして「読者の認識」



以上のことから、会話文の中の前景・背景が確認できた。それにもかかわらず、会話文は全体から見たら背景という見方がされがちだった。しかし、上で検討したような「読者の認識」を考慮に入れつつ、物語の本筋（前景）とは何か、ということについて考えながら分析を進めるうちに、いわゆる前景・背景理論には語り手<sup>6</sup>の存在を考慮に入れていないのではないか、という疑問を持つに至った<sup>7</sup>。そこで、今しがた分析した会話文の外枠をなす地の文の (18), (24) を加えて、語り手を考慮に入れて分析してみたい。

図4：時間の連鎖と語り手の交替

虚構上の語り手（地の文での語り手）Now 1



矢印は連鎖性を表す。w は wayyik̄tol, h は hinne を表す

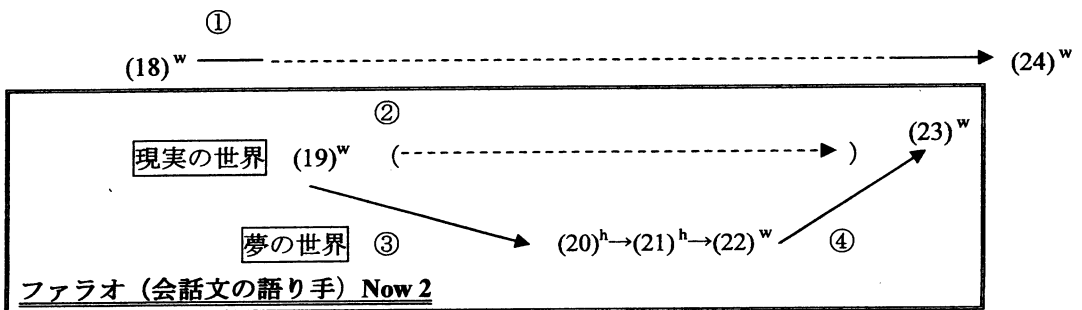
上の図4は会話文である(19)~(23)の図3を二重線の四角で囲み、会話文を囲む(18)と(24)を付け加えたものである。山岡(2001)は語り手を分析する際に、語り手の「今」である「Now1」と、登場人物の「今」である「Now2」という概念を用いる。まず、物語の語り手は物語世界の外の「今：Now1」に住み、一方、登場人物は物語世界の中の「今：Now2」に住んでいる。したがって、登場人物と語り手の属している時間は別次元ということになるので、地の文(18)と会話文(19)のwayyik̄tolのそれぞれは時間的な連鎖はない。したがって地の文(18)につながるwayyik̄tolは(23)で会話文が終わった後の(24)とい



うことになる。もちろん、会話文 (23) と地の文 (24) の wayiḱṭol のそれぞれは時間的な連鎖はない。しかし、分析例 5.2. で提案したように物語の読者は本に書かれた文字を追う（または読まれている音声を耳にすることにより）ことで、次々に展開してゆく場面を認識してゆく。今までの前景・背景理論では、会話文の中にも wayiḱṭol が出現して「時間的に連鎖する出来事」があるにも関わらず、地の文のみを前景、つまり物語のメインラインとして会話文はメインラインにはならなかったように思われる。本稿でも時間の連鎖に注目して分析を行ってきたが、そこには「語り手の存在」を考慮に入れていなかった。ここで語り手の存在を意識してみたらどうなるだろうか。本例は個人的体験談が語られている。つまり地の文での虚構上の語り手から会話文の語り手へというように語り手が交替していると考えることが出来るのである。語り手が交替すると、前の語り手からの時間的連鎖は途切れるが、そこからメインラインもシフトする。つまり会話文であっても、物語のメインラインになれるのである。図で表すと下の図 5 のようになる。ここでは(18)以降で語り手の交替が起こっている。したがって wayiḱṭol が(18)(19)で出現するものの両者にはつながりはない。しかし、読者の意識は次の語り手に向けられると考えられるので、メインラインも(19)~(23)になる。そして再び(23)以降で語り手が交替し、メインラインも(24)に移ってゆく。

図 5：語り手の交替による前景(メインライン)の交替、そして読者の認識

虚構上の語り手 (地の文での語り手) Now 1



矢印は連鎖性を表す。w は wayiḱṭol、h は hinne を表す

6. まとめと今後の展望

本稿では、時間の連鎖に注目して分析を進めつつ、語り手の存在を考慮に入れた分析を試みた。語り手が交替するとその前の語り手の時間的連鎖が切れることもあるが、語り手の交替と共に、メインラインもシフトするので、会話文であってもメインラインになることができる。物語によっては複数の語り手が存在するものもあるので、語り手の交替という概念を前景・背景に取り入れると、複雑な物語の分析に対応できる可能性があるのではないだろうか。今後はより多くの文学理論の知見を取り入れつつ、テキストだけではなく、語り手、読者も含めて前景・背景を吟味して考察を深めていきたいと思う。

## 【参照文献】

- Bush, F. (1996) *Ruth, Esther*. Word Biblical Commentary 9. Dallas, Texas: Word Books, Publisher.
- Endo, Y. (1993) *The verbal system of classical Hebrew in the Joseph story*. Assen: Van Gorcum.
- Hopper, P. J. (1979) Aspect and foregrounding in discourse. In: T. Givón (ed.) *Discourse and syntax*, 213-41. New York: Academic Press.
- Longacre, R. E. (1989) *Joseph: A story of divine providence. A text theoretical and textlinguistic analysis of Genesis 37 and 39-48*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Schneider, W. (1974) *Grammatik des Biblischen Hebräisch*. München: Claudius.
- 遠藤嘉信 (2003) 「聖書ヘブル語説話文研究における『近景・遠景化仮説』の問題」  
*Exegetica*, 14: 77-90.
- 池田晶 (2005) 「聖書ヘブライ語の物語の会話文における *koʕal* 形の用法について」『言語学論叢』24. 筑波大学一般・応用言語学研究室.
- (2006) 「聖書ヘブライ語の物語における *hinne* の用法—創世記に基く談話分析—」  
筑波大学博士課程人文社会科学研究科文芸・言語専攻中間評価論文.
- 池田潤 (1985) 『古典ヘブル語物語談話における時制転換について：Waw-Convulsive 現象の再検討』筑波大学大学院文芸・言語研究科修士論文.
- (2004) 「アマルナ語から見た聖書ヘブライ語の接尾活用形」『言語研究』126: 69-92.
- 池田潤・高橋洋成・池田晶 (2003) 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について：文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6: 61-106.
- 牧野成一 (1983) 「物語の文章における時制の転換」『言語』12/12: 109-117. 大修館書店.
- 曾我松男 (1984) 「日本語の談話における時制と相について」『言語』Vol. 13, No. 4, pp. 120-127.
- 月本昭男 (訳) (1997) 「旧約聖書 I 創世記」岩波書店.
- 山岡實 (2001) 『「語り」の記号論 日英比較物語文分析』東京：松柏社.
- ヴァインリヒ, H. (1982) 『時制論』脇阪豊他訳, 紀伊国屋書店.

## 【注】

- <sup>1</sup> 本稿は、2006年5月に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士課程中間評価論文の一部に大幅な加筆修正を施したものである。なお、本稿で用いるヘブライ文字のラテン文字転写は池田潤・高橋洋成・池田晶 (2003) に従った。
- <sup>2</sup> 詳しくは池田潤 (2004.: 74.fn. 24) を参照のこと。
- <sup>3</sup> 前景／背景は、近景／遠景と呼ばれることもある。
- <sup>4</sup> 研究史については池田潤 (2004)、池田晶 (2006) を参照のこと。
- <sup>5</sup> 「創世記 41 章 1 節前半」を示す。
- <sup>6</sup> 語り手の概念については山岡 (2001) を参照。
- <sup>7</sup> 前景・背景の問題を論じたものではないが、山岡 (2001) でも、語り手の問題を考慮に入れると解決する問題が多くある、ということを指摘している。